



MACHI no HANASHI  
101 Stories  
Complete Edition

街のはなし

谷山恭子

KYOCO TANIYAMA Lat/Long project

---

MACHI no HANASHI  
Book-in-Book

過去から未来へ

新たな発展型地域づくり手法の考察

—「街のはなし」プロジェクト

日本大学大学院危機管理学研究科教授 鈴木秀洋\*

## 第1 新しい時空を超えた地域づくり

街は、地域に住まうすべての人たちが主人公である。本書は、地域の一人一人が、時空を超え、過去と現在を行き来することを可能とする。今この地に住んでいることにわくわくし、愛おしくなる、誇らしくなる、隣の人とこの地域のことをもつと話したくなる、そんな画期的な地域づくりの書である。筆者は、本書が、今後地域づくりの新しい道を切り拓くものであり、かつ、アート分野と行政分野を架橋する学際的・学術的意義のある書籍として注目されていくと確信している。

筆者は、憲法・行政法・地方自治法を専門としており、かつ、これまで実際に自治体公務員として、長らく地域づくりに関わってきた。その観点から、以下で本書の意義と魅力について論じる。

### 第2 谷山の「街のはなし」の特徴

#### 1 徹底して個々人の価値を平等に尊重する

この「街のはなし」のプロジェクトを立ち上げたアーティストの谷山恭子。筆者はこれまでも谷山のアート作品に触れてきた。谷山は、常にその地域に根差し、その

地域の課題を魅力に変えて最大限に引き出すサイト・スペシフィックなインスタレーションやソーシャリー・エングレイジド・アートを手掛け、国内外で実績を築いている人物である。

谷山は、街を「緯度と経度」で表す。この手法は、多くの人に驚きを与える。この点を無機質に思う人がいるかもしれない。しかし、実際の谷山の哲学はその真逆であり、どこまでも個々人の多様な温もりを十二分に体感させるアート創りを行う。

地域の特別を取り取り礼賛するのではなく、その地域で、日々悩み、笑い、おしゃべりして、買い物をして、散歩をして、という市井の老若男女の日常の物語を紡ぐ。谷山は、街の物語に、肩書きの人間や著名人を登場させない。人の優劣や序列につながるような手法を排し、この地域に住まうすべての人たちにとつての物語を浮かび上がらせようとする。

筆者の専門から解説すると、憲法の個人の尊厳の原理

(13条)と平等原則(14条)という根源的価値をアートによる地域づくりの観点から徹底して実現するものといえる。誰もおいていかない、誰にも目配りをする。すべての人の価値を平等に尊重する地域づくり手法として、行政が忘れてはならない視点がここにはある。

## 2 過去からつながっている今との歴史的視点(縦糸を紡ぐ)

当該地域の歴史的背景とその歴史を生かしつつ、今後どのような地域づくりをしていくのか、そのことを地域住民に理解してもらい、かつ、一緒に協働して地域をつくっていくことは、自治体行政施策の要である。

自治体行政は、そのため、住民意見を採り入れようとアンケートを行い、住民意識調査等を行い、審議会などで住民意見を取り入れることで、住民参加の地域づくりに腐心する。

しかし、住民の多様な意見を前に立ち往生することは稀有なことではない。<sup>※出</sup>町会や地元商店街中心に住民の声を収集した後に、子どもをはじめとする多様な声が届けられることがあるからである。また、増加する単身世帯

は地域との交流が途絶えがちであること、さらに、特に都心部自治体では転入・転出の住民層が多いこと、出生・死亡の人生サイクルも勘案すれば、住民の入れ替えは地域で絶えず相当数行われ、今いる住民が数年後住み続けているとは限らないことなどは自治体のHPの公開データからも明らかである。果たして、固定的地域住民層に加えて、こうした変動する住民層にも地域の物語を伝達する工夫はできないだろうか。

残念ながら、地元出身の著名人のゆかりの家や碑の歴史的観光スポットとしての建立はあっても、市井の人々にとつて自分事となるような身近な物語が語り継がれていかない。過去の地域の物語は、自然には承継されず、新たにアウトリーチして積極的に収集し、かつ、伝達する手法・手段を工夫しない限り、地域の歴史的歩みや魅力を伝えていくことは困難なのである。

谷山のプロジェクトは、この地域の過去からの物語を、直接住民の一人一人に質問し聞きとる手法で時間をかけて丁寧に拾い集め、それを地域の共有知の歴史として形にするものである。谷山は、地域住民の藤井本子とタツ

グを組み、制作の過程で次のような考え方を築いていった。すなわち住民のまちづくりの努力の蓄積と街の成り立ちを知ることは、次世代のまちづくりの担い手である子どもたちの地域への愛着につながり、その関心は保護者である子育て世代に波及していくという考え方である。その結果、「街のはなし」は新しいアート手法による住民目線の住民の語りによる歴史編纂、昭和のニュータウンの温故知新を形にしたものとなつた。

今後の自治体が進めていく地域づくりのお手本となるモデルプロジェクトといえる。

### 第3 地域の横のつながりの今を作る（横糸を紡ぐ）

谷山のこのプロジェクトは、多層な世代、多様なバッターグランドを有している地域の人が現在進行形で参画している。まさにこのプロジェクトの遂行過程自体が、地域づくりである。

かつて地域づくりの中心は町会であった。自治体行政も町会主体の情報伝達、広報、地域の集いや地域のお祭りに予算を充ててきた。しかし、今では町会加入率は右

肩下がりの状況である。町会の重要性を否定するものではないが、町会に入らない住民層や町会と結びつかない住民層との新たな協働装置が必要となる。<sup>※四</sup>この点は地域の活性化・地域創生という観点からも全国の自治体での地域づくりの課題となつてているが、必ずしも真の好事例を見ない。いわゆるコンサル等外部に指導を頼んだり、事業委託している自治体も少なくない。

しかし、そうした外部依拠の自治体を分析すると、一時テレビなどで取り上げられ好事例として名を売り成功したように見えても実は、長いスパンで辿つてみると問題を抱え衰退している例が少くない。筆者は、①市井の日常の営みや歴史をする姿勢が乏しい点、②面で地域資源を結びつける活動に乏しい点（切り取り主義の問題）、③参加・参画者が一部にすぎない点、④短期視点でのイメージアップで長期継続性の視点に乏しい点の4点の理由分析を行つてている。

谷山のプロジェクトは、この4課題をすべてひっくり返しているように思う。谷山も地域外の人間である。しかし、谷山は質問・教えを乞うという姿勢でその外部性

を生かしつつも、徹底的に子どもから大人までさまざまな世代の人々と会話を交わし、地域の人々に合わせた目線で地域に入り込む。直接地域住民と触れ合い、それぞれの人々の心の奥底から物語としての地域の宝を掘り起こす。

谷山は、地域に愛着を持つている人もそうでないであろう人も、子どもも大人も、仕事をしている人もそうでない人も、地域にいる人すべてに対して、この地の景色、風、におい、音、味わいなどその人ごとの感受性を引き出し、この地域への磁場・磁石の役割を果たす。筆者は、この地域への愛着に差がある人々を地域好きに変えていく谷山のアートの魔法を目の前で見せられている感覚を体感した。

このプロジェクトは、書籍に収まるものではなく、写真映像、音（自然音、解説音）、YouTube、住民の対談、街の中の音声碑、街歩き（スマホ利用）など、さまざまな形で街をデザインし、視覚・聴覚・触覚などで街を感じさせる。まちの人たちにこのプロジェクトやイベントに参加してみると楽しそうだと感じさせる。たく

さん的人に支えられ住み続けたいと思わせる。住んだらこの地域の人たちと積極的に交流したいと思わせる、磁石装置があちこちに仕掛けである。

地域をよく知り、それを伝えてくれる人たちも、一方的に語るのでない。彼女ら彼らもまた、新たな体験、再発見を繰り返している。

筆者は、地域づくりにおいて現在進行形で新しい発見を繰り返して地域の人たちがつながっていくこれほどの双方向発展型の長期継続プロジェクトを他に知らない。画期的な発展的まちづくり手法として、全国の各地域で谷山のプロジェクトが立ち上がるところで地域の横糸がつながっていくものと考える。

#### 第4 行政主導のまちづくりからの転換発展

国は地域創生という名の下に地域づくりの後押しを行ない、自治体も観光や地場産業・地域特産の宣伝（新たな名産づくり）等で地域の魅力を発信しようと摸索する。

しかし、前述（第2、3）したように行行政主体のまちづくりは、特別性・著名性や商業的側面に傾きかつ外部

の目を意識しそうる。日常生活に根差した市井の眞の姿と実際に住んでいる内部の目を軽視しがちである。この地域を持続的に愛する内部の人を増やしてはいよいよと思える（「お化粧中心の地域づくり」といえる）。

これに対し、谷山が行う地域づくり（「街のはなし」）は、ありのままの姿を浮かび上がらせ、その地域に住んでいる人の地域愛を育てていくものである（「内面重視のすっぴん地域づくり」といえる）。現在の人と過去の人たちを対等な形でつなぎ、今立っているこの場所が、過去の多くの人々の重層的物語とつながっていることを感じ、何げなく歩き、休み、散歩していた街の見方が変わる。新しい息吹が吹き込まれ、長い歴史の中で今この地で生活していることが、過去からの贈り物であるかのような温かい気持ちにさせられる。孤独を感じてこの地に一人でいても自分の背中に多くの人達が温かく話しかけ支えてくれる気持ちになる。今この地に存在することが愛おしく、誇らしく思えるようになるのである。

なお、この谷山のプロジェクトの遂行過程において特筆すべきことは、谷山が長く地域活動を続けて住民や行

政との信頼関係を築いてきた地域のキーマンとタッグを組むことができたために、行政が、この「街のはなし」の活動に理解を示し協力的だったことである。こうしたプロジェクトが成功するためには、地域住民らの主体的な活動に対し、行政側（担当者）の理解と歩み寄りが求められる。「協働」「連携」という言葉がよく使われるが、その具体化としての先行好事例として、本プロジェクトには行政が学ぶべき宝が詰まっている。

## 第5 展望（行政職員必読の書として）

谷山は、それぞれの街で生活している現在のリアルな交流に、かつてのこの街の姿を知っている人たちを登場させ、過去この地で生活していた人たちとの会話、交流を働きかける。この地で見て、聞いて、感じてきた景色をその体温ごと今現在の私達と交流させようとする。

今筆者らが立ち、風を感じ、空を見上げているこの場所は、過去同じように、風を感じ、空を見上げていた人がいた場所である。時間を超えて現実に体験させてくれる「街のはなし」が、地域の縦糸と横糸をつなげる。緯

度と経度で既定される日常のいつもの場所がその場にゆかりのある何世代も前にその場にいた人たちとつながり、過去と現在を行き来する。そんな特別の場所となる。

街は、過去から現在そして未来への縦糸と、現在住まう地域でのつながりという横糸とが紡ぐ時間と空間の入り混じった多面的・多角的・多義的なものであり、そこに十人十色の物語が展開されている場所である。谷山はそれを鮮やかに体験させてくれる。

筆者は、谷山の「街のはなし」を読み、実際にまち歩きに参加させてもらった。筆者にゆかりのないはずのこの地域が好きになつた。住んでみたくもなつた。無性にこの街を歩いている人、佇む人に話しかけたくなつた。「街のはなし」が、全国の自治体で読まれ、今度はそれぞれの地域で過去と現在の対話が始まり、縦糸と横糸が紡がれる。悲しい記憶も楽しい記憶も含めて、過去の人たちとの交流によつて、その地域にとつての大切な命のバトンを受け取ることができよう。

最後に、筆者の専門的見地からすれば、本来「街のはなし」は行政が主体となつて予算を組み、公助として行

うべきプロジェクトではないかと考える。住民中心の自助・共助的まちづくりは好ましい活動であるが、予算的に単発的なボランティア事業になりがちである。これほど効果を生むプロジェクトを積極的に経済的援助という形で長期的に支援継続することこそが公助のあるべき姿なのではなかろうか。本書は、全国の自治体公務員必読書として研修テキストに指定されるべきである。本書が今後のまちづくりに温かい革命を起こすに違いない。

※ i 鈴木秀洋研究室 <https://suzukihidehiro.com/>

※ ii 本論稿では自治体を挙げて課題を指摘することが目的ではないため、あえて自治体名は出さない。

※ iii 災害時の自助・共助を考える際にも堅緊の課題である。鈴木秀洋『社会的弱者にしない自治体法務』（第一法規、2021）第7章参照。

※ iv 地域、まち、街の用語について、行政では「地域」、法律用語としては「町」・「街」、協働的広義の意味では「まち」を使うことが多い。厳格な意味で使い分けられていないが、谷山が「街」に込める思いと筆者が「新しい発展型地域づくり」に込める思いは同一方向であると考える。

# 街のはなし

110111年一月三一日 初版印刷  
110111年一月三一日 初版発行

企画・文 谷山恭子

編集・校正 谷山恭子／藤井本子／伏見学

写真 谷山恭子／藤井本子／小池美咲／久保麻理子  
音と映像の記録 藤木和人／スタジオシフォン

印刷・製本 藤原印刷株式会社

ブックデザイン 永松大剛

発行 街のはなし実行委員会

〒221-0001 横浜市青葉区美しが丘1-14-15

セントラルプラザ三階 ヒマバコ内

Mail : contact@machinohanashi.com  
HP : www.machinohanashi.com



落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、いかなる場合も著作権法違反となります。

地図出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp>)。地理院タイル（標高タイル）を加工して作成。

Printed in Japan